Peshawar-kai
ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092（731）2372
FAX 092（731）2373

No.88
2006年6月28日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp ＊アドレスが変わりました

表紙絵　谷の水場（画・甲斐大策）

悪化する情勢をよそに、用水路は1500ヘクタールの灌漑を達成	中村　哲
2005年度会計報告	ペシャワール会事務局
●農業計画報告　飼料・食用作物ともに着実な成果	伊藤和也・進藤陽一郎・高橋修
ニューオフィス建設はてんやわんやの四ヶ月でした	芹沢誠治
殺し屋から携帯電話！	杉山大二郎
紙幣の向こうにある人々の思いを忘れず	村井光義
診療所門番の拘引事件をめぐって	紺野道寛
アフガン版「竹取物語」(2)	鬼木　稔
会報88号、お届けしまーす！	溝口武男
「『らい』表記問題」という問題	福元満治

ペシャワール会は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

悪化する情勢をよそに、用水路は1500ヘクタールの灌漑を達成

作業地の上空を盛んに軍用ヘリコプターが過ぎてゆく。時には威嚇するように頭上を旋回して射撃音が聞こえる。けたたましくも忙しいことだ。我々は地上をうごめくアリのように、ひたすら水路を掘り続ける。…沙漠が緑野に変ずる奇跡を見て、天の恵みを実感できるのは、我々の役得だ。水辺で遊ぶ子供たちの笑顔に、はちきれるような生命の躍動を読み取れるのは、我々の特権だ。そして、これらが平和の基礎である。

PMS（ペシャワール会ジャパン・医療サービス）総院長　中村 哲

2005年度を振り返って

「アフガン問題」は、知れば知るほど底が深い。旱魃対策に奔走するようになってから、更にその思いを深くする。伝わらぬ実情に不満を覚えるだけではない。ここに至って、地球規模の環境の激変、「グローバリズム」の名の下に進行する、グロテスクなカネ社会の膨張と都市化、そしてその結末を既にして垣間見る気がする。この潮流が手っ取り早く富を求める欲望に支えられているとするなら、私たちは、先進諸国を動かす欲望の集積と対峙していることになる。そして、その一員たる自分自身とも対峙しているのだ。

侵される側の立場に立てば、暗い鬱憤が湧いてこないこともない。国益の名の下に戦争が正当化され、現地の無数の犠牲は顧みられることがない。「自由とデモクラシー」でさえ、戦争合理化の小道具に変質してしまった。「人々の人権を守るために」と空爆で人々を殺す。果ては、「世界平和」のために戦争をするという。いったい何を、何から守るのか。こんな偽善と茶番が長続きするはずはない。

作業地の上空を盛んに米軍のヘリコプターが過ぎてゆく。時には威嚇するように頭上を旋回して射撃音が聞こえる。けたたましくも忙しいことだ。我々は地上をうごめくアリのように、ひたすら水路を掘り続ける。彼らは殺すために空を飛び、我々は生きるために地面を掘る。彼らはいかめしい重装備、我々は埃だらけのシャツ一枚だ。彼らは暗く、我々は楽天的である。彼らは死を恐れ、我々は与えられた生に感謝する。彼らは臆病で、我々は自若としている。同じヒトでありながら、この断絶は何であろう。

彼らに分からぬ幸せと喜びが、地上にはある。乾いた大地で水を得て、狂喜する者の気持ちを我々は知っている。自ら汗して、収穫を得る喜びがある。家族と共に、わずかな食べ物を分かつ感謝がある。沙漠が緑野に変ずる奇跡を見て、天の恵みを実感できるのは、我々の役得だ。水辺で遊ぶ子供たちの笑顔に、はちきれるような生命の躍動を読み取れるのは、我々の特権だ。そして、これらが平和の基礎である。

元来人に備えられた恵みの事実を知る限り、時代の破局は恐れるに足りない。天に叛き人を欺く

灌漑開始を喜ぶ、用水路の地元作業員たち

虚構は、必ず自壊するだろう。平和とは、単なる理念や理想ではない。それは、戦争以上に積極的な活力であり、我々を慰める実体である。私たちはこの確信を持って、今日も作業現場で汗を流す。

今年度も、平和を願う人々の意を体し、荒野を緑野に変えることを以って日本の良心の気力を示したいと思います。現地事業はいよいよ佳境に入ってきました。ご支援に心から感謝したいと思います。

2005年度の概況

ペシャワール会の活動は二二年を経過した。振り返ると、二〇〇〇年以降の六年間は、大旱魃、9・11、空爆、米軍進駐、復興支援ブームと、どの時期よりもめまぐるしかった。人々の往来が増え、カーブルを見る限り、華美な風俗が目立ち、携帯電話が普及し、大都市は交通ラッシュが目立つようになった。だが、アフガニスタンの政情は安定とは程遠い。「アフガン復興」の結末は、「銃剣に守られる平和があり得ない」ことを実証するかのように、混乱を年毎に増している。

東部のジャララバードでもパキスタンから戻って住み着く人々が目立つようになった。しかし、都市に流入した旱魃避難民と同様、高物価が生活を追い詰め、かつてなく治安が悪化している。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は、「アフガン復興」が始まって一年後の〇三年二月、「パキスタン在住のアフガン難民二〇〇万人中、一四〇万を帰した」と発表した。だが、実数は少しも減っていない。〇五年秋、パキスタン政府は「アフガン難民・三〇〇万人」を訴え、悲鳴を上げている。都市貧困層の大半は、「アフガン復興」の恩恵に浴していない。

他方、戦火は拡大している。殊にアフガン東部（クナール州、ザーブル州、パクティア州）では、年を追って空爆が増しており、軍事力の増強が図られている。アフガン進駐の米軍は、〇二年の一万二千名から、今や一万八千名、加えて英軍が四千名を増派、NATO軍増強が検討されている。〇五年は、それまでカーブルに留まっていたISAF（国際治安維持部隊）が東部地区に展開、カナダ軍などに少なからぬ死傷者が出ている。

学校やモスクなどへの誤爆が相次ぎ、学童や市民の犠牲者も絶えない。これら一連の事態に対する人々の反応は、ジャララバードの暴動（〇五年五月）、カーブルの市街戦もどきの暴動（〇六年六月）にまで発展、戒厳令に近い布告が出された。人々は「米軍撤退は遠からず」と感じ始めている。〇五年一〇月、米軍当局は「五年後に撤退」との見方を示したが、行き先は不透明である。

一方、大旱魃はなおも進行中である。〇五年春の降雨・降雪は一時的な希望を持たせたが、六月の異常気温で逆に大洪水を招き、河川が氾濫、食糧生産に更に打撃を与えた。〇六年冬は異常な少雨に見舞われ、止まることのない旱魃に人々は強い不安を抱いている。危機感を抱いたアフガン政府は、「国民の半数がまともな食糧を得ることができない」と訴えて「貯水池」を奨励する布告を出したが、外国諸団体は殆どが首都カーブルに集中、農村の砂漠化は大きな国際問題としては取り上げられなかった。二〇〇六年は史上最悪の旱魃になる可能性がある。

かくて、追い詰められた人々の心情が自然と暴力的な反抗に傾いてゆくことは、想像に難くない。タリバーン勢力の活発化は、このような民心を背景にしている。

この情勢の中で、我々の活動は、「まずパンと水」

灌漑によりクズ・クナール地域500ヘクタールが耕地化した
（上は灌漑前＝03年2月、下は灌漑後＝06年3月）

を求め、旱魃対策に全力が注がれた。マルワリード（真珠）と名づけられた用水路建設は、〇五年四月になって取水口から四・八キロメートルが完成、第一次灌水が始められた。〇六年四月には一〇・二キロメートルに達し、第二次灌水を実現、砂漠化して放置された計五〇〇町歩（約五〇〇ヘクタール）を回復、多くの難民たちが帰農した。わが用水路で直接灌漑に浴する面積は〇六年五月現在、五五〇町歩、冬の渇水期に他の水路に余水を送り、加えて約一千町歩の小麦の枯死を防いだ。

これによって、住民たちの信頼を獲得した我々は、戦火と反米感情の広がる中、絶対的な安全を手にしたと言える。実際、用水路工事現場付近で外国人誘拐と襲撃が頻発する中、何事もなかったかのように着々と仕事が進められている。

井戸事業は、地下水の枯渇と同時に、内部の綱紀の弛みで伸び悩んでいたが、〇五年度に全井戸事業を一時撤収し、建て直しが図られた。ジャララバードの新事務局態勢で、将来に向けて確実な礎石が置かれた。家賃の高騰、水事業の大規模化、長期的取り組みを考慮し、新政府から一万平方メートルの土地を得て、基地オフィスを移転した。今後、公共性の高いところに集中し、着実な歩みが予想される。

医療事業は、〇五年度に米軍の活動でクナール州奥地の二診療所（ダラエ・ピーチ、ヌーリスタン・ワマ）を現地行政に移譲したが、悪条件の中、ダラエ・ヌール診療所（ニングラハル州）、ラシュト診療所（パキスタン北部国境）を維持している。

05年度事業報告及び06年度の計画

1. 医療事業

〇五年度は九二、三〇一名が診療を受けた。ペシャワール基地病院、各診療所の主要実績は別表2の通り。用水路工事の進展に伴って医療以外の仕事が増え、かつ医療職の人材流出が続く悪条件の中を、持ちこたえている。しかし、重機などの機材、修理を始め、かなりの資材をパキスタン側に依存する状態で、PMS（ペシャワール会医療サービス）基地病院の存在は不可欠である。〇四年度にアフガニスタン・クナール州の二つの診療所を移譲したものの、ハンセン病を中心とする診療は継続されている。

●〇五年度（〇五年四月から〇六年三月）の詳しい診療数は別表5のとおり。総診療数九二、三〇一名（うち外来八六、〇〇五名、のべ外傷治療五、一七八名、入院治療一、一一八名）である。

●ハンセン病および類似障害の診療……ハンセン病の外来受診者七八名、入院治療受けた者一四一名。

●基地病院における検査件数は二一、〇〇四件で、内訳は別表3の通り。

2. 飲料水源確保事業

二〇〇〇年七月、旱魃被害の著しかったダラエ・ヌール診療所付近に端を発した本事業は、〇三年六月には井戸一千本を超え、〇六年五月現在、一四〇〇本を超えた。この中には灌漑用井戸一一、カレーズ三八本が含まれる。ダラエ・ヌール下流域は、見違えるほど緑がよみがえっている。

だが、ニングラハル州全体で見ると、地下水位は下がり続けており、再掘削したものが大半である。全域で一四〇〇本の維持補修に当たるのは不可能となった。これは住民の自立を損なうだけでなく、予算上でも泥沼状態に陥った。このため、アチン郡で採用した「即時譲渡、住民自主管理」を進めてきたが、職員が利害関係に巻き込まれ、動きがつかなくなっていた。そこで、新方針を採り、「全水源を住民に譲渡、いったん井戸掘り事業を解散。その後に再開して公共性の高い場所に集中すること」が断行された。

〇五年度は、ジャララバード事務所の新態勢を整えつつ、ほぼ全ての譲渡を完了、全井戸事業を停止した。職員も数名を残して次の段階に備えた。少なからぬ職員たちが過去の業績とPMSの名声の上にあぐらをかき、これに個人的な利害が絡んできたので、弊風を一新して出直す必要もあった。懸案は、やっと実行に移され、〇六年度に「再出発」となる。〇五年度の業績は別表4の通り。作業地が増えていないのは、以上の事情による。

3. 灌漑事業

これまで会報で再三述べてきたので、詳細は過去の報告を参照されたい。

二〇〇五年四月、岩盤周りの難所（四・五キロメートル地点）を越え、念願の第一次灌水が始められた。〇三年三月着工から二年である。年度末には一〇・二キロメートル地点まで完成、〇六年

四月、第二次灌水でブディアライ村下流域を部分的に潤せた。これによって、過去の旱魃で無人の荒野となっていた田畑、約五〇〇ヘクタールを年度内に回復、緑野を取り戻した。〇六年五月現在、灌水の面積は正確には以下の通り。

（1）過去の旱魃で砂漠化していた耕地……約四八〇ヘクタール

（2）元来の沙漠が耕地となった地域……約五〇ヘクタール

（3）冬の取水が困難となった他の用水路への供給……推定約一千ヘクタール以上

（1）と（2）は、何れもニングラハル州シェイワ郡クズ・クナール地方。（3）は既存の地域最大の二千ヘクタール以上を潤す「シェイワ用水路」への給水。大洪水で取水口が埋まり、浚渫困難で冬の取水量が半分以上低下していた。PMSも努力したが完全復旧が不可能と判断、我々のマルワリード用水路から余水を送って回復したものである。

なお、過去の会報で述べてきた「第一期工事・全長一四キロメートル」を「全長一三キロメートル」に訂正する。これは主に、ルートの短縮と測量誤差による。

〇五年度は、以上の主水路の延長と共に、分水路の整備、大洪水・集中豪雨による決壊部の復旧工事、取水口の改修が重なり、大きな努力が払われた。

マルワリード用水路は、〇六年度中に残るブディアライ村二・七キロメートルを完成し、〇七年度から始まる第二期工事七キロメートルを以って

表1　用水路の概要（第一期工事、全長13キロメートル）

①名称；アーベ・マルワリード（真珠の水）
②全長；第一期工事13km。（第二期工事を入れると計約20ｋｍ）
③灌漑面積；総計4,000ヘクタール以上。
　1）往時にダラエ・ヌール渓谷の水に依存してきた地域；約1,200ヘクタール、
　2）新たに開墾され得る地域；約800ヘクタール
　3）既存水路（シェイワ用水路、シギ用水路）への供給で保たれる面積；約2,000ヘクタール以上
④最大取水量；増水期毎秒6.5トン（限界最大；毎秒7.5トン）、渇水期；毎秒5.5トン。一日量では50万トンに相当する。
⑤平均傾斜；0.0007
⑥クナール河との落差；4.5ｋｍ地点で18m、10.2ｋｍ地点で24m（何れも冬季）
⑦推定損失水量；20～30％（開通直後）
⑧付帯設備；取水堰；幅40m、長さ220mの斜め堰を巨石、60トン蛇籠で造成
　護岸（取水部）；蛇籠工　高さ１ｍの蛇籠4段を円形ピラミッド状に積上
　護岸（洗掘決壊危険部）；石出し水制４、導流堤１（100m）
　堰板・巻上げ式水門；取水部で２（三連）、沈砂池で１（四連）
　スライド式水門；主水路２（三連）、分水路５
　沈砂池；1.6ｋｍ地点、長径380m、短径330m
　道路横断暗渠；３（長さ10m）
　枯れ川横断サイフォン；６（長さ30～80m）
　遊水池；7ｋｍ地点　1
　樹林帯；用水路内側は全長にわたって柳枝工、
　　集中豪雨危険地帯３ヶ所；クワ、ユーカリ、柑橘類らの森造成
　　水路外側の高い斜面；クワ、オリーブによる根固め
　分水路；５（幅1.5m、計5.5ｋｍ）
　貯水池；3ヶ所（ブディアライ村）
⑨年間予想収穫量（灌漑面積4,000ヘクタールとして計算）；
　裏作；小麦15,000～20,000トン
　表作；トウモロコシなら16,000トン以上、土質によってはコメ数万トン
（なお、一般に現地の土は保水性が極めて優れ、灌漑面積と送水量の相関は、日本の基準と必ずしも一致しない。）

灌漑用水路の最先端工区に近い、
I地区の掘削作業現場

完了する予定である。これによって、ニングラハル州北部の穀倉地帯は往時の農業生産を完全に回復した上、新たな耕作地を加えることになる。

また〇六年度は、ブディアライ村上流（ダラエ・ヌール渓谷）に貯水池を多数設ける予定。アフガニスタン全土で最も犠牲になっているのは、比較的低い（四千メートル以下）山の雪に依存してきた所（中小河川流域）である。大河川からの取水はむしろ例外的で、こちらの方が広域にわたる旱魃対策のモデルとなると信ぜられる。

付け加えると、初めから無人地帯であったと思えた荒野も、帰農した住民の話から、一〇年、二〇年、三〇年前からと、次第に増加していたことが分かった。中小河川の水量減少と農地の砂漠化が、相当前から徐々に進行していたことが分かる。場所によっては、ダウード政権時代（一九七四――七八）以前からのものもあり、少なくともアフガン東部農村では、旱魃が難民化の主因であったと推測される。

4. 農業計画（農業チームによる詳細な報告あり）

ダラエ・ヌール試験農場では、〇五年度の成果は以下のとおり。

（1）アルファルファは、現地の原種（シャフタル）より優れていることが認められ、広がる勢いを見せている。

（2）日本米：元来日本人ワーカー用に作ったところ、単位収穫量が優れ、周辺農家が興味を示している。インディカ種（長粒米）からジャポニカ種（短粒米）に一変したスワト（パキスタン）の例もあるので、拡がる可能性は否定できない。

（3）サツマイモ：昨年に続き、普及の勢いを見せている。

（4）茶の栽培：上流のウェーガル村に移してから、周辺農家に配った苗が大きくなり、希望が持てるようになった。

その他、ソバなども試みられたが、現地の人々の好みや食文化の問題もあり、なお手探りだと言える。〇六年度は新たな試みはない。これまでの継続で、地道な研究が続けられる。

5. ワーカー派遣事業

用水路工事が拡大して、更に働く人材が求められる。任務期間を最低二年としてから、やや安定してきたが、増員と共に長期滞在者が必要なことが痛感されている。また、絶対的な医師不足は続いており、これも日本人医師を希望している。

〇五年度被派遣者は別表6の通り。

6. その他

ジャララバード水対策事務所は、長期態勢を築くべく、〇六年三月、借家から政府公用地へ移転した。設計・施工は全て自前で行い、一万平米の敷地に、これまでバラバラになっていた資機材置き場も集め、管理が容易となった。

中村哲（なかむらてつ）九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、二〇〇三年春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約九万人（二〇〇五年度）。

表2　各診療所の主な診療内訳

	外来数	外傷治療数	入院数
ＰＭＳ基地病院	36,906	3,662	1,118
ラシュト診療所	4,378	146	-
ダラエ・ヌール診療所	44,721	1,370	-
Total	86,005	5,178	1,118

表3　ＰＭＳ病院検査数の内訳

血液	3,103	心電図	646
尿	3,185	超音波断層写真	2,562
便	2,018	心エコー	63
らい菌塗沫検査	99	細菌	0
抗酸性桿菌	356	体液（髄液・胸腹水等）	10
ﾏﾗﾘｱ血液ﾌｨﾙﾑ	1,542	その他	1,778
ﾘｰｼｭﾏﾆｱ	80	内視鏡	311
生化学	1,863	病理組織検査	0
ﾚﾝﾄｹﾞﾝ	3,388	小計	21,004

表4　水源確保事業の現状

（　）内は完成した井戸・修復したカレーズの数
（2006年4月15日現在。第Ⅰ期井戸事業は同日を以て完了し、4月16日より第Ⅱ期井戸事業を開始）

	飲料井戸	灌漑井戸	ｶﾚｰｽﾞ	計
ダラエ・ヌール	395 (263)	11 (11)	38 (38)	444 (444)
ソルフロッド郡	542 (542)			542 (542)
ロダト郡	263 (263)			263 (263)
カイバル峠	4 (4)			4 (4)
アチン郡	171 (171)			171 (171)
スタッフ用	20 (20)			20 (20)
その他	17 (17)			17 (17)
合計	1412 (1412)	11 (11)	38 (38)	1412 (1412)

表5　各診療所の診療数と検査件数の内訳

国　名	パキスタン		アフガニスタン
地域名	ペシャワール	ラシュト	北東部山岳地帯
病院・診療所名	ＰＭＳ	ラシュト	ダラエ・ヌール
外来患者総数	36,906	4,378	44,721
（内訳）　一般	35,978	4,331	42,517
ハンセン病	76	2	0
てんかん	547	7	297
結核	231	0	1
マラリア	74	38	1,906
入院患者総数	1,118	-	-
（内訳）　ハンセン病	141	-	-
ハンセン病以外	977	-	-
外傷治療総数	3,662	146	1,370
手術実施数	2	-	-
検査総数	21,004	-	7,290
（内訳）　血液一般	3,103	-	816
尿	3,185	-	1,275
便	2,018	-	1,188
抗酸性桿菌	356	-	77
マラリア リーシュマニア	1,622	-	3,443
その他	10,720	-	491
リハビリテーション実施総数	7,322	-	-
サンダル・ワークショップ販売総数	35	-	-

表6　現地派遣ワーカー

氏名	職種	派遣開始	現在
◎医療			
1 藤田 千代子	院長代理・看護部長	1991年9月	継続中
2 中山 博喜	会計	2001年4月	2006年3月終了
3 坂尾 美知子	臨床検査技師	2002年7月	継続中
4 紺野 道寛	ダラエヌール診療所受付薬局	2003年7月	継続中
5 村井 光義	会計	2005年3月	継続中
6 河本　定子	薬局	2005年9月	継続中
◎灌漑用水路建設計画・農業計画			
7 宮路 正仁	井戸担当	2002年11月	2005年10月終了
8 近藤 真一	用水路	2003年1月	継続中
9 鈴木 祐治	用水路	2003年6月	2005年9月終了
10 伊藤 和也	農業	2003年12月	継続中
11 本田 潤一郎	用水路	2004年1月	継続中
12 松永 貴明	支部会計	2004年4月	継続中
13 進藤 陽一郎	農業	2004年5月	継続中
14 神戸 秀樹	用水路	2004年5月	2006年5月終了
15 鬼木 稔	用水路	2004年5月	継続中
16 重住 正幸	事務	2004年9月	2005年9月終了
17 西野大介	用水路	2004年9月	2005年7月終了
18 杉山 大二朗	事務	2005年2月	継続中
19 芹澤　誠治	事務	2005年4月	継続中
20 横山　尚佑	用水路	2005年9月	継続中
◎定期・短期派遣者			
21 高橋　修	農業顧問	2002年3月	定期
22 石橋忠明	用水路	2003年12月	定期
23 鳴神　浩	医師	2005年9月	短期派遣
◎2006年度新規ワーカ			
24 竹内英允	ＰＭＳ病院	2006年4月	継続中
25 木薮健児	用水路	2006年5月	継続中
26 荒野一夫	炊事担当	2006年6月	継続中

05年度会計報告

2005年度の主な収支

寄付を頂きました団体の御名前につきましては紙面の都合上、割愛させていただきます。
期間　2005年4月～2006年3月

一般会計（単位：円）

［収入の部］

1	会費・寄付	238,783,167 ①
2	補助金等	0
3	収益事業収入	2,314,278
	書籍等販売収入	2,314,278
4	利息雑収入	2,537
5	その他収入	21,569
6	基金繰入	150,000,000 ②
	年度収入計	391,121,551
	前年度繰越	5,729,596
	収　入　計	396,851,147

①個人会費寄付（個人一八、四四九件、団体九三二件）
②「いのちの基金」から繰入
③パキスタン、アフガニスタン診療所
④飲み水等供給事業
⑤作物育成試験等
⑥農業用灌漑用水路建設
⑦ジャラバード事務所
⑧日本人ワーカー費

［支出の部］

1	現地協力費	349,951,631
	うちPMS運営費	63,840,894 ③
	井戸掘り事業	41,016,215 ④
	農業支援事業	2,278,679 ⑤
	灌漑用水路	198,145,966 ⑥
	アフガン事務所	19,992,927 ⑦
	現地ワーカー費	11,185,965 ⑧
	渡航費	7,389,349
	国内活動費	6,101,636
2	広報費	3,694,384
3	事務局費	10,549,124
	年度支出計	364,195,139
	次年度繰越	32,656,008
	支　出　計	396,851,147

収益事業会計

［収入の部］

書籍売上	2,611,843
カレンダー等売上	4,540,000
ビデオ売上	118,000
雑収入	209,780
売上収入計	7,479,623

［経費の部］

書籍原価	165,167
カレンダー制作・販売費	4,151,100
ビデオ仕入額	26,250
送料等経費	576,000
経費合計	4,918,517
前期繰越損失	23,548
事業税	223,280
当期収益（一般会計繰入）	2,314,278

「いのちの基金」残高

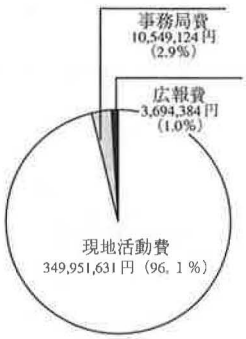
期首残高	650,000,000
一般会計へ繰入	150,000,000
期末残高	500,000,000

未使用切手、書き損じ葉書の寄付

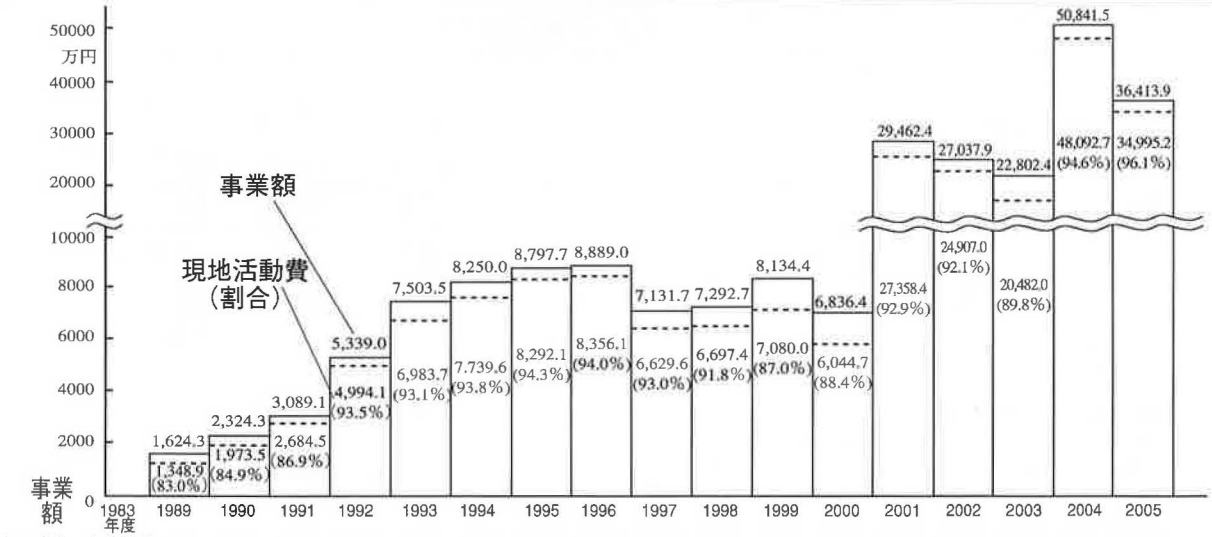
寄付いただいた件数	1,000件
未使用切手枚数	50,520枚
同　金額	3,551,575円相当
書き損じ葉書枚数	28,009枚
同　金額	1,374,268円相当
合計金額	4,925,843円相当

＊会報発送費用等の節約になっています。

● 2005年度事業額（支出ベース）
396,851,147円



事業規模（寄付件数・事業額）の推移　1983～2005（年度）



年度	1983	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
個人会費・寄付件数		685	1,097	1,322	2,202	2,722	3,096	3,503	3,283	2,968	3,432	3,279	3,467	59,478	21,167	18,079	15,119	18,449
団体寄付件数		55	91	98	114	159	191	145	150	221	135	172	176	689	1,730	1,275	953	932

●農業計画報告――実り多かったこの一年

飼料・食用作物ともに着実な成果

農業計画現地担当　伊藤和也・進藤陽一郎　農業指導員　高橋　修

農業計画が始まって四年、今回は少し胸を張って報告できることを嬉しく思っています。

「緑の大地計画」と名付けて農業計画がスタートしたのは二〇〇二年の三月でした。この時、特にダラエヌール渓谷の下流域は見渡す限り砂漠化した農地でしたが、現在ではPMSが掘削・修復した灌漑用の井戸とカレーズ（横穴式の地下水路）から供給される水により、急速に緑豊かな農地に生まれ変わってきました。この中に設置した二ヶ所のパイロットファーム（試験農場）の試験作物は、一際輝くほど立派に生育し、「緑の大地計画」の先導的な役割を果たしています。

農業計画四年間の結実、「収穫祭」の開催

パイロットファームの内容説明は後回しにして、まず収穫祭について報告します。

昨年一一月一七日に村の長老と関係農家を招待し、大々的に試験作物の試食・紹介と意見交換を行いました。PMSも中村先生をはじめ、またペシャワールからも関係者全員に参加いただきました。冒頭中村先生から、参集者に対して「農業計画も少しずつ目途がついてきた。PMSは今後とも食糧の増産と生活の安定に全力を尽くす」と力強い激励をいただきました。

当日、「現地の人達の口に合うかな」と恐る恐る出した料理メニューは、①日本米の現地風ガーリックライス、②大豆の現地風甘辛煮、③サツマイモのチップス揚げ、④日本種トウモロコシ入りのナン、⑤メード・イン・ダラエヌールの番茶etcですが、（お世辞もあると思いますが）何れも大好評を得ることができました。また当日、参集者に対して、水稲、大豆、トウモロコシの種子をお土産として配布しました。

会食の過程で私たちから、作物ごとに栽培の目的と栽培技術のポイント並びに料理法を説明し、これを元に活発に、和気藹々の雰囲気で意見交換が行われ、大成功のうちに収穫祭を終えることができました。

この収穫祭の成功は、多くの皆さんからお寄せいただいた温かいご支援の賜と感謝しています。また農業計画発足の前段階における目黒ワーカーの準備作業、発足直後から二年半にわたる橋本ワーカーの下地作りの活動が土台になっていることを忘れてはならないと思います。

この収穫祭は、過去四年間、総じて試行錯誤を重ねながら進めてきた農業計画のひたむきな努力と経験の結実であり、次の段階への跳躍台にしなければならないと思っています。

まず主食用の作物を

初めに収穫祭に使った水稲について報告します。この品種は日本から持ち込み、収穫期における鳥類の被害を回避するため、ローカル（地元）品種と同じ栽培パターンを採用し、六月下旬に田植して一〇月上旬に刈り取りました。収量は一〇アール（一千平方メートル）当たり五九〇キログラムと日本の平均収量よりも遥かに高く、私たち自身がびっくりしました。日本米の味も好評で種籾の配布希望が殺到しています。中村先生によると、「農家は、ローカル品種は販売して自家用に日本種を栽培すると言っている」とのことです。

今年は、日本種の難点である脱穀作業を容易に

4年間の結実、「収穫祭」に集まった地元農家の人々（05年11月17日）

稲穂も重い日本米の収穫風景（05年10月）

するため、日本の江戸時代から明治時代に使われていたのと同じ〝千歯こき〟を試作することとしています。

水稲と同時に収穫祭に使った大豆は、〇三年にインドネシアから熱帯に適した品種を持ち込みましたが、二年間の試行錯誤によって栽培技術の目途がつき、昨年の収量は、日本の平均収量に匹敵する一〇アール当たり一七〇キログラムまで到達しました。大豆栽培の狙いは、〝畑の肉〟と称される栄養価によって農家の食生活を改善するとともに、豆科作物の栽培によって土壌を肥沃にすることを目的にしています。

小麦は昨年の秋から初めて本格的に取り組みましたが、一〇アール当たり三一〇キログラム収穫でき、見事に麦秋を飾ることができました。この収量は日本のトップクラスの水準で私たちも驚いています。栽培に当たって心がけたことは適期播種と適期作業が主ですが、簡単なことでも着実に実施することの重要性を改めて認識しました。

飼料作物は普及段階へ

飼料作物であるソルゴーは、現地のトウモロコシが年一回きりの収穫であるのに対し、年間三～四回、収量も三～四倍収穫することができるようになりました。

アルファルファーについては、以前から現地で栽培されてきたホワイトクローバーが年三回程度の収穫であるのに対し、新たに導入したアルファルファーは真夏と厳寒期を除いて一・五ヶ月毎、年六回以上収穫できることが確認できました。因みにアルファルファーはアフガニスタンが原産地で、所々に野生種が生えています。つまり私たちは改良品種を里帰りさせたことになります。またこの品種は人間用の野菜としても好評で、時々近所の子供達が新芽を摘みにやってきます。

両作物とも、現地に合った栽培技術が確立できましたので、昨年から新たに採種圃を設け、周辺農家とかキャナル（用水路）から新たに灌漑される地域に種子を配布する段取りを進めています。

私たちが飼料作物を重視する理由は、農家で飼われている牛・山羊・緬羊等の家畜は、農家の数少ない収入源となっています。また特にミルクは冬季の貴重な栄養源であり、餌の確保は家畜を飼育する上で至上の命題となっているからです。因みに現地には、四季を通じて日本のような餌にする雑草が極めて乏しく、特に冬季は干からびたトウモロコシしかないのが実態です。

遂に成功したサイレージ作り

現地でやっているサイレージ作りの方法は、深く掘った穴の中に井戸枠を四本積み上げてサイロを作り、その中に細断した飼料作物を詰め込んで一・五～二ヶ月間乳酸発酵させ、冬季用の家畜の飼料を作っています。

〇三年から始めたサイレージ作りは、一年目、二年目とも全部腐敗または大半が腐敗するなど失敗を重ねてきましたが、今年三年目にして初めて完全に成功することができ、農家とともに歓声を上げました。また冬季のミルク生産に役立っているのを見て喜んでいます。

過去二年間、なぜ腐敗するのか原因が分からず、一時は「中断も止むなし」と考えたこともありましたので、今年の成功は感慨一入です。

今年成功した秘訣は、サイロの側壁にビニールフイルムを垂らして気密性を確保したこと、ソルゴーと一緒に詰め込んだトウモロコシの糖分によって発酵が旨く進んだこと、の二点だと判断しています。餌が乏しい冬季二ヶ月間の飼料がサイレージによって確保できることは、農家が安心して家畜を飼育できることを意味します。

飼料作物「ソルゴー」の生育も順調

今年の秋は、農家への普及を目的とし、より簡便な、井戸枠を使わない素掘りの穴にビニールフイルムを垂らして詰め込むサイレージ作りに挑戦します。

たかがサツマイモ、されどサツマイモ

サツマイモは〇三年以来、黒斑病の発生と種芋貯蔵技術・育苗技術、それに泥棒に悩まされてきました。昨年は漸く黒斑病対策、栽培技術対策の目途がつき、また種芋の現地貯蔵についてもおおよそ勘所が分かってきました。今年は現地貯蔵した種芋を使って育苗し、現在栽培が行われています。しかしまだ、栽培技術の全般について不安定ですので、今後二、三年試験栽培を続ける必要があると考えています。

私たちがサツマイモに力を入れている理由は、格好良く言えば、痩せた乾燥地で栽培でき、また同じ面積で水稲の二倍以上、トウモロコシの五倍以上の人口を養うことができるからです。年輩の方はご承知だと思いますが、六〇年前の敗戦前後、日本でも小学校の校庭にまでサツマイモが栽培され、日本中がサツマイモで食糧難を乗り切ってきました。今の飽食の日本では〝たかがサツマイモ〟かも分かりませんが、現地の食糧事情を考えますと〝されどサツマイモ〟なのです。

パイロットファーム近辺の人々が歓声を上げてサツマイモを収穫（05年11月）

しかし私たちの本音の一部は、収穫時における村人の「ワアー、デカイゾー」の歓声が、何事にも代え難い喜びであるからかもしれません。

換金作物としてブドウの栽培も本腰

ソバは〇四年に持ち込み、栽培は見事に成功しましたが、調理法がネックとなってまだ普及の目途は立っていません。ソバは、初秋に収穫するトウモロコシと晩春に収穫する小麦の端境期にナン・主食の一部に利用でき、また七〇～八〇日という極めて短期間に収穫できる作物ですので、土地の有効利用という観点からも将来役立つ作物であると考えています。現在ナン以外の調理法についても鋭意研究中です。

南瓜と馬鈴薯（メークイン）の春作は、昨年試作して一応成功しましたので、今年は秋作にも挑戦し、年二回収穫して食卓を賑わすことを期待しています。

〇二年の秋に育苗を開始し、〇三年の秋に定植したブドウは、現在結果期を迎え、大きな房が見られるようになりました。しかし植え付け方法と樹形づくりの失敗もあり、現在、房数を抑えながら樹形の仕立て直しの最中といったところです。将来ブドウを販売用の作物に育て、現金収入の一助にしたいと願っています。当面の悩みは、ブドウ棚の材料とせっかく残したブドウ果実の泥棒対策です。

試行錯誤・悪戦苦闘は続く

お茶の取組みは試行錯誤・悪戦苦闘の足跡そのものです。〇二年の六月に日本から持ち込んだ五〇本の苗は全滅、〇三年の三月にパキスタンの試験場で貰った一〇〇本は半分が枯死、同年一一月に再度パキスタンから持ち込んだ一千本は七割が枯れてしまいました。枯れた主な原因は高温とアルカリ土壌障害並びに灌水不足ですが、細かい管理作業に慣れていない農家の体質もかなり影響しています。

このため苗から種へと発想を転換し、日本で寄贈いただいた茶の種子を持ち込み、〇四年の一二

房をつけてきたブドウ（06年4月）

遮光用の「ソルゴー」に守られて新芽を出したの木お茶（03年11月定植）

月、〇五年の一月、同年一一月に播種しました。また栽培地も気温の低い北部の二集落に広げてきましたが、まだ成功の目途は立っていません。

今日まで、アルカリ土壌の改良に必要な硫黄華（いおうか）については、度々（たびたび）足を運んでコネをつけたペシャワールの肥料店から購入し、ヒヤヒヤしながら国境を越えて持ち込む苦労が続いてきました。硫黄華は火薬原料にも転用できるので特に神経を使っています。

現在お茶は、畦間（あぜま）に栽培している遮光用のソルゴーと遮光用の三尺ササゲに守られ、元気の良い新芽が吹き出しています。まだアルカリ土壌対策など、いくつか未解決の問題が残っていますが、将来、現地産のお茶で、お茶好きなアフガン人の喉を是非潤したいと夢に見ながらこれからも努力していきます。

未来を見据えて

農業計画は、いろいろな作物を〝試作〟する段階から、限られた土地と限られた用水でいかにして〝安定した収量を上げるか〟の取り組みに移行しつつあります。また資材購入費はもとより、土地を肥沃にする有機物も無い中での取り組みですので、現地にある資材をいかに旨く利用するか、また現金支出をいかにして少なくするか、もっと工夫しなければならないと考えています。この一環として、すでに緑肥（りょくひ）作物を導入してきましたが、さらに農薬自給を目指して今春に馬酔木（アセビ）を植え付け、また今秋には除虫菊の播種を予定しています。

また今後、農業計画の成果を定着させるために、文化の違いをどう克服するかも課題となります。少し説明しますと、限られた土地と限られた用水で安定した収量を上げるためには、農家の技術を、従来の粗放的な栽培管理から、緻密で、集約的な栽培管理に、徐々にステップアップすることが必要になるということです。

もう一点重要な課題があります。それは将来ダラエ・ヌール渓谷の農業を担ってくれる人材の育成です。私たちは農業計画を進めるに当たって、パイロットファームの担当農家・活動成果を地域に広める役割のサテライトファーマー（普及担当農家）に対し、一つ一つ目的と内容を説明しながら同じ目線で仕事を進めてきました。またできるだけ彼等の意見を尊重するよう努めています。時には〝まどろこしい〟と思うこともありますが、将来を考えれば、人材の育成は作物の成果と同等に、農業計画の重要な課題であると自らに言い聞かせています。

人間は、安心して毎日食べられることが生存と平和の基礎的な要件です。私たちは、農業計画の取り組みと成果を通じて、現地の農家が希望と目標を持ち、彼等自身の力で、安定した生活と平和な村を築いてくれることを心から願っています。このため私たちは、農家とともに一歩一歩着実に成果が上がるようこれからも頑張っていきます。

ご支援をよろしくお願いします。

アリアナ大地の心 3
アァダムがいてのワタン

甲斐大策

「アッラーフ、アクバル！　ゼンダバード（永遠なれ）アフガニスタン！」

二十数年前の夏、男達は、国境沿いの谷を低空で北上するミグ戦闘機に、牛にたかる蝿程の意味もない銃撃を加えていた。銃声と硝煙は男達を昂揚させ、誰もが叫んでいた。やがて全員の声が一斉に高まり、アフガニスタンにかえて、出身地パクティアを絶叫していた。

「ヤァ・アッラー（神の名の下に）！　ゼンダバード・パクティアー！」

ほとんど耕地はなく資源もない山地パクティアで、アリ・ヘル族他パシュトゥンの数部族はこの数世紀、南部の大部族が熱心な、カーブルの王権や政権の争いには距離をおいてきた。外敵の侵攻にだけ山を出て大部族を援け、パクティアの自治権を戦利品とし、参戦中でさえ国内外に運送にまつわる出稼ぎを続けてきた。

旧ソ連軍撤退、カーブル政権の混乱、人心の荒廃は南部にタリバンを生み育てた。その頃、ジャージィ村を見下ろす岡の上で長老と、ミグに挑んだ折の雄叫びを想い出していた。

「私達がいるからジャージィだよ。パクティアだよ。でなければ石だらけのただの山さ。アァダム（ひと）がいてのワタン（国）だろう。……アフガニスタン……そうだな、カンダハルの連中と外国人がつくったパンジュラァ（篭、柵）だからな……。」

長老は、カーブルの権力は何百年もひとを棄ててきた、といった。私達の歴史は今日もそれを重ねつづける。アァダムがいてのワタン、といい切るジャージィ村のパクティア人は、タリバンはまだ若いからね、ともいった。

＊ワーカー通信

ニューオフィス建設はてんやわんやの四ヶ月でした

ジャララバード事務所責任者　芹沢誠治

工費はすべて一平米あたりで計算

PMSは昨年の二月に、オフィスの移転を決め、私が赴任した四月には、政府から借りる土地もほぼ決定していました。灌漑省との契約では、PMSは無料で土地の提供を受け、自費で建物を建設し、一〇年後に引き払うとき、建設したすべての建物を政府に引き渡す、という双方十分にメリットのある取り決めでした。

ところが七月になり、いざ着工して整地を始めると、軍部から横やりが入って、契約は白紙、二転三転の憂き目に合い、最終的に土地が決まったのは一〇月。旧オフィスの契約が翌年の二月に切れるので、私が前任の重住さんからジェネラル・マネジャーを引き継いだとき、工期はもう四ヶ月しか残っておらず、どうなることやらと先が思いやられました。

こちらへ赴任する直前、中古で買った自分の家をリフォームしたのですが、面白くてほぼ一ヶ月、毎日通っていました。私は井戸屋の職人の息子であり、建築現場が大好きだったのです。とは言っても、新任六ヶ月、ズブの素人。言葉も分からず、しかもアフガニスタンの工法なんて全くの無知ときています。敷地一ヘクタール、建坪五〇〇坪以上、三棟、合計一八室、これを中村医師に全部任すと言われて……顔には出しませんでしたが、まずはトホホと、途方に暮れました。分かっていただけると思います。

まず始めに驚いたのは、工費の決め方。サッカー場より大きな一〇〇m四方の土地に、レンガの外壁を作るのですが、一㎡＝二一〇ルピー（日本円にして四二〇円）だから、四〇〇m×三m（高さ）×二一〇ルピー＝二五万二千ルピー（日本円約五〇万円）というわけです。建物本体もこれと同じ計算方式、一立法フィート＝一七八ルピーが見積もりのベースとなります。おおざっぱに言えば、一八のしきりのある巨大なレンガ作りの箱の見積もり＝予算となります。日本では、最初に工事の工程ごとに各資材から手間賃までの細かい予算の一覧表がでますが、こちらはこれで終わり。たまりかねて、主要資材（石材・レンガ・砂利・セメント・鉄筋・ハウラ）ごとの予算を出せと言うと、工事が始まってみないと（実際は終わってみないと）分からないと言いながら、渋々走り書きを持ってくるという始末です。

三カ国語の「伝言ゲーム」

相棒のアフガン人設計技師、エンジニア・ハビブラとテカザール（請負業者）の棟梁シャワス・カーンを頼りに工事を始めたのですが、これがまた、テンヤワンヤ。

分かっていると思っていたハビブラさんは、ひょっとするとこの手の建物を手がけるのは初めてではないのかと思えるほど、トンチンカン。ただただ、お金をたくさんかけて、いい格好するばかり、設計図にしても、どこからか人のものをそっくり写してきた気配がある。素人の私が、その柱は入らない、その入り口は狭すぎる、階段の段差を同じにしろ、窓はもっと小さく、屋根の鉄筋を全部やり直せ、ハウラセメントはもう一度練り直せ、という指示を出さなければならない。しかもこの指示が、日本語・英語・パシュトー語で、ハビブラさん→テカザールの棟梁→レイバーと伝言ゲームで伝わっていくと、最後にはトンデモナイ

完成したジャララバードの新事務所

ことになっている。もう本当に「毎日が戦争」、怒鳴り散らさないと、仕事にならなかった。ハビブラさんは、一時は辞表を提出する始末でした。

しかし、いい経験でありました。本音で怒ったので、本音の人間関係ができた。現在はまた、敷地内にモスクを建設していますが、静かにいい神様の住まいができつつあります。

三月に日本から会長先生達が見えられ、ささやかな新築祝いのセレモニーがありました。中村医師のこちらの風土に合わせた、「実験的ハウラ・セメント建築作戦」が大成功し、今六月の暑い盛りだというのに、扇風機も必要としないで、日本から送られた、「のれん」の下で、快適に住んでいます。これも御支援のおかげ、本当にありがとうございます。

殺し屋から携帯電話！

ジャラバード事務所　杉山大二郎

やんぬるかな、ケータイ！

去年、交通事故に二度も巻き込まれて首のムチウチ症に悩まされた。水路現場への凸凹道を車で通勤したり、鉄筋曲げの力仕事等が当分の間は無理なので、中村医師から首が本調子になるまで事務仕事に配置転換する旨を伝えられた。今まで事務仕事なんぞやったことがない私だったが、日本人ワーカーは仕事経験がなくても現場に放り込まれて我流で修得してゆく（中村医師曰く、「本を読んで泳ぎ方を覚えるよりも、まず溺れて……じゃなかった、水の中に入るのが先」との由）ので、勿論仕事を覚えることに吝かではない。

しかし一つだけ事務仕事で不満がある。それは携帯電話を持つことだ。私は日本にいたときも仕事絡みで短期間だけ携帯電話を持ったことがあるが、実に嫌なものだ。事務仕事の為に今は預かっているが、その煩わしさに辟易する。確かに即時性を考慮すれば、使い勝手も良かろうが、伝達手段の便利さならパソコンの方が断然良いと思う。eメール通信ならば、自分の思うことをじっくり文章にして書けるので大いに活用している（もっとも、あまりネットは繋がらないが）。だが携帯電話だと人と大事な話をしている時に突然鳴り出すので、そんな時は思わず壁に投げつけたい衝動に駆られる。緊急の要件で電話が掛かることもあるので電源を入れているが、出来ることなら電源を切っていたい（切っていたら電話が全然掛からない、と後でスタッフからクレームが来たケド）。まったく此方の事情もお構い無しに（そりゃ相手はわからんやろうケド）鳴るもんだから、今まで頭の中で考えていたことや組み立てた論理（大したこと考えてないケド）が一瞬で霧散させられるのは実に許しがたい。

アフガン人スタッフにそんな理由で説明しても彼らにしてみれば携帯電話はステイタスシンボルなのか、やっぱり持っていたほうがいいよ、とつれない返事。そういや電話が鳴って出るときはとても嬉しそうだよな。でも自分が話したいときに「ワン切り」して番号通知をオンにして相手に掛け直して貰おうとするところが実にセコイ（私も日本にいるときはこの技を大いに活用したが、吝嗇のやることは万国共通か？）。

「殺し屋からだったよ」

そんなある日、憶えのない電話番号が表示されてけたたましく着信音が鳴る。

「サラーム・ワレイコム。アサドゥラはいるかね？」

「は？　アサドゥラ？　そげなスタッフおったっけ？　ちょっと待っとって」

隣にいたスタッフのサブール君に電話を代わっ

杉山ワーカによるイラスト

てもらう。サブール君はしばらく相手の話を聞いていたが突然、両眼が点になってしまった。何か懸命に弁解しているようなので、好奇心も手伝って後で何の話をしていたのかを尋ねてみた。

「サブちゃん、何の話ばしたとね？」

「いやー、聞いてくれダイさん、うちはNGOの仕事をやっているって説明したんだけれど、相手が頑なに誤解してね、困ったよ」

「じゃあ間違い電話なん？」

「とんでもない間違いさ。この間の仕事の話だが、奴を生かすのか殺すのか、今日これから出掛けるから最後に確認したいってさ。殺し屋からだったよ」

「そげん大事な仕事の話ば電話でするとね？　そんなん、ちゃんと会って話ばせんといけんよ。サブちゃん、間違い電話やろぅばってん、そこは注意ばせんといけんよ」

「……。ああ、仕事は何より誠実さが大切だ。でも殺し屋から事後報告もあんのかな？」

現代文明の象徴である携帯電話を時代錯誤な殺し屋が使うとこういう喜劇になる。何とも微笑ましいではないか、後で返信ワン切りしてみるか。

紙幣の向こうにある人々の思いを忘れず

PMS本院会計　村井光義

ナマの声が集まる部門

私の現在の所属部署はPMS病院会計。会計の仕事は大まかに二つあり、「会計報告書作成」と「給料作り」です。報告書は日々の会計データをもとに作成しています。毎日現金の出納を帳簿につけ、コンピューターに入力し、手元にある現金を数え、誤差がないのを確認しています。給料作りは事務所からのスタッフ勤務表、会計で管理している給料前借の清算や各種手当を更新し作成しています。細かな仕事では、祝日及び夜勤手当、年休、退職金の積み立て等をルールによって管理しています。

これらのルールはペシャワール会現地活動二十数年の歴史の中で必然的に発生してきたものです。例えば、退職金。ほとんどの人は計画的にお金を管理することが苦手なため、退職時に一銭もお金がないことも考えられます。また、突然の必要な支出に対する蓄えもないので、退職金を担保に給料前借りすることも可能です。PMSがスタッフの代わりに退職金を貯蓄しています。

パキスタンは自国及び外資系銀行も機能していて、少なからず銀行との付き合いもあります。特に気をつけることは、身だしなみです。汚れた服やスリッパで行くと相手にしてもらえないこともあるので、いつも以上にきちんとした服装、シャキッと背筋を伸ばし、口をキュッと閉じ、銀行に行きます。銀行に限らず外部の人と会うときはPMSの代表であることを忘れぬよう気をつけています。

最近は原油の高騰に伴い、すべて値段が上がっています。いつもお茶を飲む彼らにとって必需品である砂糖は、この半年で値段が二倍に跳ねあがり、肉類よりも経済的でお手軽な庶民の食べ物である豆にも影響が出始めました。この現状に対し現地職員の不満がよく聞こえてきます。会計は職員のお金に関するナマの声が聞こえる部署のひとつです。また病院で何かするときは現金の移動が起こるため、必然的にいろいろな情報が集まってくる面白いところです。

会計トリオの「結束」

PMS病院は州政府から認可を得ている社会福祉法人で、一九九八年の開院以来着々と組織が整備され、まだ発展途上ですが、ある程度完成されています。現金のリクエストや休暇手続きにもたくさんの手順があり、NGOといえども現地職員にとっては会社のような存在です。彼らは家族のために働き、病院から受け取る給料で養っています。時には、長年共に働き、彼ら自身の担当する仕事が性(しょう)に合い、PMSのプロジェクトが好きであっても、経済上または他の事情でPMSを離れなければならない職員もいます。先日も、一〇年以上働いていた職員がアフガニスタンに帰って行きました。PMSを理解している職員がいなくなるのは寂しく、仕事

の上でも多少支障はありますが、ここで生きている彼らの生活を無視し、無責任な引き留めはできません。会計は現在現地職員二人と私の三人ですが、誰かがここを去るその時まで一緒にすばらしいパフォーマンスをし続けることを約束しました。

紙幣を一枚一枚数え、レシートとにらめっこの毎日。その二つの物理的なものの向うにある、病院を必要とする患者さんの存在、職員の就業時の苦労、会員の方々の思いを忘れず、ありったけのアンテナを張り、もっと仕事、習慣、感覚を身に付け、いかなる状況にも対処できるように備えるつもりです。

診療所門番（チョキダール）の拘引事件をめぐって

ダラエ・ヌール診療所薬局　紺野道寛

警察官の横暴

会員の皆様へ。こちらはすっかり暑くなりました。昨年同様、ダラエヌールでは五月から網ベッドに蚊帳（かや）を吊り、外で寝ています。夜一〇時に発電機が止まると、蚊帳に潜り込み満天の星空と対面します。みなが聞くラジオの声、犬の鳴き声などを聞きつつボッーとしていると、いつの間にか眠りに落ち、気が付くとあら不思議、雲ひとつ無い透けるような青空になっています。この鮮やかな変化に、毎日朝から得をしたような気分になります（時々、急患が来て揺り起こされるのですが……）。

さて、少し前なのですが診療所でこんなことがありました。ダラエヌール診療所の門番（チョキダール）のMさんが、診療所で警察官S氏に銃身で顔が腫れ上がるほど叩かれ、警察まで連行されたのです。私と地元出身のナースですぐに後を追いましたが、Mさんは四挺の銃を向けられていました。さらにS氏の罵（ば）声と住民の視線を浴びつつ、両手を後ろ手に縛られての連行で、前を行くMさんの背中を見ながら強い怒りを覚えました。

結果からいうと、ディストリクト（地元詰所）で強く抗議しすぐに釈放してもらい、最終的にS氏は解雇されました。原因は、S氏が診療所内で大声を出しながら自宅にいる家人の為に薬を強要したことに対し、Mさんが注意したからです。MさんのしたことはｐＭＳでは当たり前のことで、患者本人がいないのでは診察は出来ませんし、大声を出して騒ぐ人がいる時は、診療をストップします。

しかし、一〇〇人以上の女性患者を差し置き、強引に割り込んだS氏は薬局でしっかり薬を受け取ったあと、Mさんの胸倉を掴み殴ろうとしました。その場はみなに押しとどめられ、一度は「覚えてろよ」と去ったのですが、三〇分後、三人の警官を連れて突入してきたという訳です。銃器のクリニック持ち込みは厳禁ですので、別の門番と私で止めに入ったのですが私たちを銃身で叩き、Mさんを囲み連行していったのです。

文化の違いを越えてあるもの

この事件で、私は怒りと悲しさで一杯になりました。力のある者の横暴さ・治安を守る警察の不安定さなどを感じ、落ち込みました。Mさんは、普段からとても働き者で、今回も職務に忠実なだけでした。

そんなMさんに対する仕打ちに、スタッフもみな怒りを隠さず、「診療所を臨時で閉めて、怒りの態度を示すべきだ」という強硬な意見も出ました。しかし中村先生が、「明日診療を待っている患者さんが迷惑する」と一言言われ、翌日から平常の診療をしています。私は、「トール　ドゥニヤ　キ　ジャングアレク　シタ。プレーダ。（この広い世界、どこでもそんな乱暴なやつはいる。そんなのはほっとこう）」とスタッフに言い続けました。

私が、ペシャワール会の活動を通して学んだことの一つに「日本とアフガン、何から何まで違うけど、そこに住む人は、同じ人間だということ」があります。人間誰だって怒れば悲しくなるし、楽しければ嬉しくなります。日本でもアフガンでも、乱暴な人もいれば優しい人もいます。それは、当たり前のことなのでしょうが、とても大切なことのように思います。今後どこで何をしようと、このことを忘れないようにします。

と、色々考えさせられた三年間でしたが、この夏で活動を終了させて頂くことになりました。あっという間でしたが、こうしてペシャワール会を知り、関われたことに感謝しています。これからは、この貴重な経験と出会いを生かして頑張ります。

事務局の皆さん、会員の方々、中村先生、藤田さん、個性的な日本人ワーカー、家族や友人、そして多くの現地スタッフに支えて頂きました。どうもありがとうございました。

アフガン版「竹取物語」（2）

灌漑用水路水門担当　鬼木　稔

やがてかすかな道を辿っていくと数軒の石で囲った集落に着いた。人の気配は全くなく、集落を通過すると、突然背後から呼び止める声がする。振り向くと、老人と、その後ろに子どもの姿が見える。何か大声で交渉が始まったが、何を言っているのか私には解らない。どうも竹は自分達の土地のものだから金を出せと言っているらしく、相場の金額なら支払ってもよいとサディックに伝えるが、結局は一本三・五ルピーと、法外な値段を要求してくるので交渉決裂、無視して先に進む。竹は直径二センチ前後の細いもので、相当な本数が必要なのだ。やはり普通の住民とは違うことが、この一件からも窺える。今でもヒマラヤの奥地には山賊部落が現存しているが、まさかこんな身近に……という感じである。

またもや数軒の住居があり、ここも無人の気配なのだが、今はさらに奥の耕地に放牧に行っているとの説明を受ける。しかし老人や女子供が、じっと息をひそめて我々一行の一挙手一投足を見守っているのかも知れない。

この集落は谷の中央に張り出した山稜の裾にあり、ここから谷は二股に分かれている。私達は左側の谷を遡行する。ぐっと谷は細くなり、珍しく清澄な流れにお目にかかる。かなりの速いペースで歩いてきたので、皆喉が渇いているはずなのだが、誰も谷川の水を飲もうとはしない。そのはずだ。今日からラマダン（断食月）で、太陽が出ている日中は、食べ物はおろか、水さえも飲んではいけない、イスラムの戒律を忠実に守っているのだ。一時間半ほど歩いたところで、谷間に緑が帯状になっている。ここが目的地の竹ヤブであった。

日本にある竹とは品種が異なり、遠目に見る笹の葉からは、これが竹とはちょっと判断がつきかねる。谷の両側は岩壁が急斜面にそそり立っている。突然サディックから一〇メートル上部にある岩壁の窪みを指差して、あそこで待機していてくれと指示される。せっかく手袋やノコギリを準備してきたのだが、今回は素直に従った。

そこの窪みからは、全員の作業が一望に見渡せ、下の道からは見えない、身を隠すには絶好の場所である。サディックも私の横に陣取り、ずっと密着護衛にあたっている。大分経って、対岸の岩壁に石積みの家がへばりついているのに気がついた。全く自然の風景に溶けこんでいて、何故あんな場所に家があるのか思いを巡らさずにはいられない。今日一日何事もなく、全員平穏な一日で在れば良いな……と思う反面、何か突発的な出来事でも発生すれば面白いのになあ……と期待感が混ざった複雑な思いが交錯する。

横でサディックが石を持って岩壁を叩いている。何を始めたのか覗くと、小さく突き出た赤い突起物を取っている。何と！　ルビーの原石が一条の岩層に埋まっているのだ。私も暇つぶしがてらに石を手に掘り出そうとするが、こんな原始的道具では歯が立たない。自然に剥落したものを三個見つけるが、品質は全く良くない。

他に人影は現れず、竹切りは順調にはかどっている。何か起こるとしたら、往路でお金を要求された集落だろう。直径三〇センチくらいを一束にして、合計七束ができ上がる。私達も下に降りて、皆に合流すると、レイバー（現地作業員）が私のために木で杖を作ってくれている。どうも有難迷惑だが、感謝の意を表して受け取る。白ヒゲが生えれば、こちらではもう立派な長老格になるのだ。

早速杖をつきながら下山とする。時折サディックが、私が後ろにいるかどうか振り返って確認しているが、二、三メートルに切った竹が、その度に顔面に振り回されるので、怠りない注意が必要だ。

やがて例の集落にさしかかるが、人の気配はなし、さっさと通りすぎて後ろを振り返ってみるが、予想に反し何事もなく通過できた。かくて飲まず食わずの作業は、平穏のうちに完了となったが、スリルとサスペンスに富んだ、楽しい思い出となった。（続く）

▼未使用の切手、ハガキを！

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

会報八八号、お届けしまーす！
――事務局の日常風景紹介

ペシャワール会事務局室長　溝口武男

コンニチワ！　福岡市中央区のビルの六階にあるペシャワール会事務局です。ここには二つの部屋があります。一つは会員名簿や会計の管理をする部屋です。ガッチリと鍵のかかったセキュリティ万全の部屋です。もうひとつの部屋は寄金へのお礼状を書いたり、年四回の会報発送など一般事務作業をする部屋です。

事務局の作業のほんの一部分を覗いて見ましょう……春にお届けした会報八七号発送までの事務所風景です。

分厚い郵便払込票の束にうれしい悲鳴

今年一月半ばのある日、事務局スタッフがそろそろ仕事始めに三々五々集まってきました。和気あいあいの年始のあいさつもそこそこに、事務所の机の上にドカンとおかれた「払込取扱票」入りの分厚い封筒に息を飲み、屠蘇気分も吹っ飛びました。

会費や寄付を郵便振込で送ってくださる会員や支援者の方々からの払込票のコピーが郵便局から毎日届きます。多いときには五〇〇～六〇〇通もの払込票が届くことも。今回も会報八六号を見た方々を始め、クリスマス献金、新年度の会費など年末から四月にかけてひっきりなしに届けられました。スタッフがため息混じりの「うれしい悲鳴」をあげるのは毎度のこと。事務局は、このときから「会報八七号」お届け準備に〝突入〟しました。

まずは個人情報管理セキュリティに守られた別室で「検索班」と名付けた二～三名のスタッフがそれぞれの払込票の住所などをパソコンでひとりひとりチェックします。

これなんと読むの？　文字判読に悪戦苦闘

とくにこの払込票はコピーなので、書かれた文字がつぶれたり、にじんだり、あまりにも「達筆」な文字もあり、判読に悪戦苦闘。さらには最近の町村合併、住居表示の大幅変更。転居、郵便番号の問い合わせ。ご本人に電話で問い合わせも。他のスタッフが自分の仕事を放り出して応援、五～六台のパソコンを動員してチェックに当たります。

整理した払込票をもとに「礼状班」が会費・寄付受領はがきやお礼状を書き、発送します。ここもいつも五～六名（忙しいときは一〇名くらい）のスタッフが、ボールペンを走らせています。そして、再び「別室」に回されて、会員・支援者名簿に登録するため、パソコン入力班が入力します。会報発送の封筒に貼る「宛名ラベル」を作成するための作業。

どの作業をとっても、これに従事するのはみんな手弁当のボランティア。月・水・金の自分の空いた時間に来て、自分のできることをするというのが大原則ですが、いつの間にか自分の役割と、居場所が決まります。今、その人数は四〇人前後。

アンコ？も作ります　会報発送作業

その全スタッフが集結するのが、会報発送当日。入力班がプリントした宛名ラベルを封筒に貼り、会報やその他の資料を封筒に入れる作業。なにしろ、二万通の封書を三日程度でラベル貼り、袋詰め、発送まで仕上げなければなりません。

だから、そこには様々な工夫がなされています。できるだけ郵便料を抑えるため、一昨年の冬から郵便局の割引別納郵便を利用しています。ただ、これは地域別、郵便番号別にまとめなければならない。ラベル貼りの前段で郵便番号とにらめっこ、仕分け作業に事務所内はピーンと緊張の糸が張り巡らされます。最近は、郵便物の発送代行業者も一部利用、事務所作業の軽減につとめています。

会報が刷り上がってくると、ここの独特の合い言葉が飛び交う。「さあ〝アンコ〟を作りましょ」……会報やチラシなど他の資料をひとまとめにしたもの、つまり封筒に詰め込むものだからアンコなのです。細心の注意を払って、しかも迅速に手が動きます。

そして袋詰め。やってもやっても封筒とアンコの山はまるでヒンズークッシュ山脈みたいにそびえています。この間事務所は騒然、まるで部屋全体が「グオーッ」と振動しながら突進しているようです。アンコ封じ込め作戦が終われば、郵便番号ごとにひとまとめにしてひもでくくり箱詰めして、集荷にきた郵便局員に渡します。

……「おわったーっ！」一瞬の解放感……これって端から見れば「難行苦行？？」いえいえみんな嬉々として格闘しています。会報への感想・ご意見がどっと寄せられることを期待しているからです。

また翌日からは検索チェック、礼状、名簿入力、そして会報八八号の発送作業の準備が待ってくれていました。

そしていま会報八八号をお届けします。これからも話題満載の「ペシャワール会報」をできるだけ早く、広く、お届けします。

また明日からも　一同　がんばりまーす！

「『らい』表記問題」という問題

メディアによる、言葉の「隔離」

ペシャワール会事務局・広報担当　福元満治

今年の四月二八日（後続記事五月二九日）、全国紙A紙（西日本版）に「診断書に『らい』表記――鹿児島の三町使用・指摘受け削除」という記事が掲載された。

記事によると、鹿児島県の知名、和泊、与論の三町で、保育園に入る際に保護者が提出する医師の診断書に、「結核・トラホーム・性病・らい・てんかん・その他」という記入欄があり「ハンセン病の差別的表現である『らい』」という言葉を使っていたことを町民から指摘された各町長は、ハンセン病療養所を訪れて陳謝した、というものである。その後診断書から「らい」という言葉は削除されたという。また記事には、元患者の言葉として、「『らい』という言葉を聞いただけで、昔のことを思い出して身震いする。啓発活動に力をいれて欲しい」という談話が載せられている。

一般的にいうと、「らい病」という言葉には、それに遺伝病とか業病とか天刑病とかいう根拠のない差別的イメージが付着しているので、「ハンセン病」と言いかえたほうがよいということになっている。つまり、ハンセン病の差別的表現が「らい（病）」ということではなく、「らい」にまつわる歴史的事実が差別的であった、ということである。「らい」については、従来医学用語とか病名として使われており、差別的言辞とは見なされていない。たとえばらい菌とからい反応といっても、ハンセン病菌とかハンセン病反応とはいわない。ハンセン病という名称も、一八七三年に、ノルウェーのアルマウェル・ハンセン氏が「らい菌」を発見して、感染症であることが判明したのでハンセン病とも呼ばれるようになったのである。

元患者さんが、「らい（病）」という言葉を聞けば、過去の数々の差別が甦るという事実は重く受けとめねばならないが、それを「ハンセン病」と言いかえるだけでは、その差別された過去が消えることはない。

問題の本質は、言いかえることつまり言葉にあるのではなく、差別する側の認識にあるということは明白である。変えるべきは言葉ではなくハンセン病やそれを取り巻く過去の差別的歴史に対する、現在の私たちの意識、認識ではないか。メディアの報道、三町長のすばやい謝罪や診断書からの削除をみると、その感を深くする。

ハンセン病という病は人の皮膚や末梢神経を冒す感染症のひとつで、現在では薬で治癒する病に過ぎない。しかし過去には、根拠のない偏見や差別によって、患者たちが迫害、隔離されてきた、ということをまず直視すべきではないか。それこそが、メディアや行政のやるべき啓発で、「らい」を差別用語化し、それを削除することやハンセン病と言いかえることが「啓発」ということではないはずである。

「ハンセン病の差別的表現である『らい』」という新聞記述は、全国紙A紙だけでなく鹿児島の地元紙M紙も全く同様なので、現在のメディアに共通の認識だと思われる。

ここで本来医学用語である「らい」までも差別用語化すれば、ハンセン病の実態を知らない人々の差別意識を屈折させ、さらに沈潜化させるだけではないかと思う。

「らい病」という言葉についても、ハンセン病と言いかえることだけでは、「らい病」という言葉を疎外し、さらに「らい＝ハンセン病」そのものへのいわれなき恐怖と差別を強化することになるのではないかと怖れる（熊本のホテル宿泊拒否事件への元患者の抗議に対して、匿名で陰湿な誹謗中傷が集中したことは記憶に新しい）。

以上述べたメディアや行政の傾向を黙視すれば、差別解消へ向かうどころかハンセン病の実態から目を逸らし、その病と言葉を「隔離」することで差別の沈潜・固定化を助長すると考える。「らい予防法廃止五年」の今年、各メディアが「啓発特集」を組んでいることを承知の上で、あえて発言する次第である。

追記　今回の診断書問題の本質は、「らい」表記ではなく、他の結核やてんかん等の疾病を含め、誰でも見られる形で無神経に記入させたことにあると思う。

全国紙A紙に、「『らい』を差別用語と考えているのか」と質問したところ、「差別用語とは考えていない。『らい』が医学用語であることも承知している」（広報センター）とのことであった。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

●事務局便り

＊新旧役員の交代、専従者二人から一人への移行と、それなりの変化のあった事務局体制も、大過なく一年が経過した。何よりも事務作業がスムーズになり、経費もずいぶんと節減された。また世の中のアフガンへの関心が薄らぐ中にあって、会員も寄付もじわりと増え続けている。これは中村医師を先頭に苛酷な環境で奮闘する現地スタッフと日本人ワーカーの忍耐強い日々の作業に対する信頼があるからである。また、いわば現地という舞台を支える楽屋としての事務局メンバーも、極めて地味な日常の作業を、笑顔の中でこなしている。会員の皆さんや寄付者の方々は、その舞台をまるごと支える観客（支援者）として暖かく見守り続けて下さっている。この三者のどれが欠けても私たちのプロジェクトが成立しないことを、改めて肝に銘じておきたい。

日本の世相や世界に目を向けると、あからさまな欲望を是として増殖してきた虚構の塔に、ヒビや亀裂が走りはじめた。この世に、勝ち負けなぞというものは存在しないことを、静かに示したいものである。

＊最古参のドライバーのカンジャンが今月いっぱいでＰＭＳを退職して、アフガンに帰るという。カンジャンがＪＡＭＳのスタッフになったのは二〇年前だからその歳月を思わざるを得ない。アフガンでは、六〇歳といえば、一族から敬愛される大長老である。カンジャンとその家族の安寧を祈らざるを得ない。

事務局のお手伝いをさせていただいてもうすぐ一年。水曜日の午後、数時間ですが、今では私の楽しみのひとときになっています。お礼状書きや会報発送、未使用切手の整理など、忍耐のいる仕事ですが、事務局の方々の経験豊かなお話に耳を傾けながら、でも間違えないように作業を進めていくと、あっという間の数時間です。別室では全国から寄せられる募金内容を記録する作業が行われていて二室が連動しています。経験から生み出された作業効率の良さには目を見張ります。それから大きな収穫として、時々一時帰国中の中村先生や現地ワーカの方々が来局され、ホットな活動報告が聞けることです。スライドに写しだされる水路建設現場では大変な労力が伝わってきますが、旱魃地帯を潤しながら、緑の柳を擁し、次第に延びていく用水路の様は本当に美しいです。それは現地活動を支えている皆様のくりかえし、くりかえしの善意の支援とも重なって見えます。昨夏、事務局で福岡で作られた甘くておいしいアフガンのスイカを食べました。私も種をいただいて庭に植えています。現在、蔓は三〇センチくらい。あの巨大なスイカを夢みて毎朝水を与えています。

（ＴＢ）

ペ村から

中村哲医師の本

空爆と「復興」

—アフガン最前線報告—

9.11テロ直後から2003年末まで、中村医師と現地日本人スタッフから届いた、鬼気迫る活動報告集【2刷】1890円

辺境で診る 辺境から見る【3刷】1890円

＊中村ファンが圧倒的支持＊

ダラエ・ヌールへの道【3刷】2100円

医者 井戸を掘る 1890円【10刷】

医は国境を越えて 2100円【6刷】

ペシャワールにて 1890円【8刷】

聖愚者の物語 甲斐大策

「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL 092(714)4838

ちくま文庫

アフガニスタンの診療所から 609円

筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4 TEL 03(5687)2670

価格はすべて税込価格（税5%）です

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行なうことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。役員の改選は毎年総会にて行う。

⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑨本会の事務局をＦＡＲＡＨＯＵＳＥ（〒八一〇—〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇—二五　上村第二ビル六〇三号 TEL七三二—二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603

☎092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559

発行日　2006年6月28日　No.88　会長 後藤哲也　現地代表 中村哲　事務局長 村上優　名誉会長　高松勇雄